熊日1959.11.08

抜天河

漁協側が要求する水俣新日窒工場の廃水ストップは操業ストップを意味する、それは水俣市民の死活問題だから、ストップはストップせよと市民は県知事に陳情。

▽

二十八団体の代表五十人が市長を先頭にして県庁に、押しかけたという表現は多分妥当でないだろうが、五十人も行けば、押しかけたといえないこともない。

▽

これで、漁民と市民が対立することがはっきり打出された形になった。困ったことである。五十人も行かないで、こっそり二、三人でも行ったらよかった。

▽

漁民側は、水俣市民と対立してしまっては、ますます孤立無援とは行かないまでも、心細くなるにちがいない。

▽

心細さが高じて、狂騒的になることを恐れる。水俣市の市長や、議長や、商議所会頭など、その心理的影響を察しなかったのだろうか。

▽

工場側はたとえ廃水ストップをしても、それをそう長く続けるわけには行かないはずだから、水俣市民も、その期間、しばらくの辛抱は出来ぬこともあるまい。

▽

漁民はもう長いこと操業ストップをしている。死活の"問題"でなくてそれが現実になっている。漁民も市民である。

▽

妥あれば妥あり。一利あれば一害あるのは無のことだが、害に浪いつめられているものを、更に刺激するような利の主張は避けるべきであったのではなかろうか。

▽

工場側も、いささか力を得た感じであろうが、それ見たことか、という顔なんか、ゆめにもしてはなるまい。